『世界のかなたの森』における女性の衣服とウィリアム・モリスの思想
―『ユートピアだより』との比較から―

210165　千明 瑚海

序章

ウィリアム・モリス（William Morris, 1834-1896）の『世界のかなたの森』（*The Wood Beyond the World*, 1894）は、主人公ウォルターが故郷を離れるときに目にした美しい貴婦人と乙女、小人の三人の幻想に誘惑されて「世界のかなたの森」へ迷い込んでいくファンタジー物語である。美しいメイドと恋仲になったウォルターは、恐ろしい女王から逃れるために二人で様々な困難を切り抜け、最終的に平和な国へ辿り着き結婚する。この作品は散文形式で古語を使用して書かれており、この作品のほかにもモリスは同様の散文ロマンスを晩年に複数執筆している。

モリスは 19 世紀のイギリスを代表するデザイナーであり、詩作、政治活動、翻訳、古建築物保護、私設印刷所の創設など様々な分野で活躍した人物である。モリスの功績は特にデザインの分野で評価が高く、植物模様のデザインは様々な形で商品化され現在も人気を保ち続けている。筆者がイギリスに行った際も、美術館や書店などでモリスのデザインを頻繁に目にした。モリスは、モリス・マーシャル・フォークナー商会を設立し、産業革命によって失われた職人の手仕事の復興を目指した。次第に理想的な社会の実現のために社会主義運動に参加するようになる。その信念は、晩年に執筆された『ユートピアだより』（1891）に反映されている。この作品では、革命を経て資本主義が崩壊し階級制度がなくなり、人々が喜びをもって働くことのできる社会が実現した 22 世紀のイギリスを、19 世紀から訪れた主人公ウィリアム・ゲストと住人との関わりを通して描いている。モリスが『世界のかなたの森』を執筆・刊行したのはこの『ユートピアだより』の執筆と同じ時期である。

ユートピア文学であり、モリスの政治的なメッセージが明確に読み取れる『ユートピアだより』を除いて、『世界のかなたの森』を含むモリスの散文ロマンスは余暇的なものとして注目されてこなかった。近年では、J・R・R・トールキンの『指輪物語』（1954-1955）やC・S・ルイスの『ナルニア国物語』（1950-1956）といったファンタジー文学の世界的な人気の高まりから、「ファンタジー文学の祖」としてのモリスの文学的な側面の評価も行われている。しかし、モリスの複数の散文ロマンスの中でも『世界のかなたの森』は十分に研究されているとは言い難い。このような背景から、本論文では『世界のかなたの森』を題材に作品分析を行う。これまで注目されてこなかった側面を研究することで、モリスの新たな側面が見えてくるのではないだろうか。

モリスの新たな一面を明らかにする手がかりとして、女性の登場人物の衣服に注目する。作品が書かれたヴィクトリア朝後期のイギリスでは、工業化の進展によって生活水準が向上したミドルクラスの人々にとって、社会的体面を保つために衣服は重要なものであった。

中でも、女性の装いは過剰に装飾されるようになっていった。この状況に対して、モリスは『ユートピアだより』において中世風のドレスを来た女性を登場させ、19 世紀の女性の装いを批判している。また、1882 年の講演「生活の小芸術」では、理想的な女性の衣服について言及している。モリスは、特に女性の衣服の重要性を認識していると思われる。このことから、モリスの作品において衣服は単なる装飾ではなく、デザインや社会主義運動などそのほかの活動にも繋がる自身の思想が反映されているものだと考えられる。しかし、モリスの作品を女性の衣服という視点から分析した研究は少なく、そのほとんどは『ユートピアだより』に限定されている。『世界のかなたの森』にはメイドと女王という対極的な二人の女性とその衣服が登場し、それぞれの衣服の特徴はモリスの衣服についての思想を検討する上で重要な手がかりになると思われる。

そこで本論文では、『世界のかなたの森』の女性の登場人物の衣服におけるモリスの思想を主題とした。そして、女性の衣服の表現に反映されているモリスの主張を探り、『ユートピアだより』のみに着目した研究では見過ごされてきたモリスの思想の新たな一面を明らかにすることを目的とした。研究方法としては、『世界のかなたの森』と『ユートピアだより』との比較を中心に行い、それぞれの女性キャラクターの衣服の描写の共通点や相違点を分析する。ファンタジーである『世界のかなたの森』と『ユートピアだより』という同じ作者による異なるジャンルの作品を、特に衣服の描写に着目して比較することで、モリスが重要視し、これらの作品で一貫して主張している衣服に関する価値観を明らかにすることができると思われる。

第 1 章では、『世界のかなたの森』を衣服に着目して作品分析を行う。第 1 節ではまず、『世界のかなたの森』がこれまでどのように論じられてきたのか、先行研究を批判的に検討することで明らかにする。第 2 節では『世界のかなたの森』を主要な登場人物の一人である女王の衣服の特徴や変化に注目して分析する。第 3 節では、物語のヒロインであるメイドのキャラクター描写や衣服の特徴を分析する。

第 2 章では、『ユートピアだより』の作品分析を行う。第 1 節では最初に、19 世紀当時の社会状況を、特に女性の衣服に着目して考察する。第 2 節では、当時の社会背景を踏まえた上で、『ユートピアだより』を主要な女性キャラクターの一人であるクレアラの衣服や衣服に関する発言に注目して分析する。第 3 節では、エレンの衣服の特徴や衣服に関する発言を分析する。

第 3 章ではウィリアム・モリスの衣服を巡る考えを考察する。はじめに第 1 節では、1882 年の講演「生活の小芸術」での女性の衣服に関するモリスの発言を分析し、モリスが衣服についてどのような考えを持っていたのかを明らかにする。そして第 2 節で、そのモリスの思想が形成された背景を、19 世紀後半にイギリスで起きた女性の衣服改革を巡る議論との関連から考察する。最後に、第 1 章と第 2 章で行った『世界のかなたの森』と『ユートピアだより』の作品分析をもとに、モリスの衣服に関する思想が作品にどのように反映されている

のかを分析する。

第１章『世界のかなたの森』作品分析

本章では、『世界のかなたの森』を分析し、モリスが登場人物の衣服をどのように描いているかを考察する。作品分析に入る前にまず、この作品がこれまでどのように論じられてきたのか、モリスの直接的な言及や散文ロマンスに関する先行研究をもとに探る。次に、本作品の主要な女性キャラクターである女王とメイドという二人の女性の登場人物を衣服に着目して分析する。そして、この作品において女性の描写を通じて衣服がどのように描かれているのかを論じる。

第１節　先行研究における『世界のかなたの森』に対する見方

本節では、『世界のかなたの森』に関する先行研究に対して批判的検討を行う。そして、本作品をモリスのデザインや政治活動にも通じる価値観が反映されているものとして研究の余地があるかどうかを検討する。

まず、モリスの手紙をもとに『世界のかなたの森』に対する見方について考察する。本作品が、資本主義と労働における社会主義的な寓意の物語であるとする、イギリスの週刊誌『スペクテイター』（*The Spectator*）誌の批評に対して、モリスは 1895 年 7 月 16 日の編集者宛ての手紙の中で、以下のように語っている。

> 私は『世界のかなたの森』に少しの寓意を込めたつもりはない。それは純粋で単純な物語であり、教訓的なものはない。社会的な問題について書いたり話したりするならば、私は常に可能な限り直接的であろうとする。一方で、寓話を書いている人が、それを意図したものだと最初から明らかにせず、寓意と物語が互いに浸透しあうよう注意しないのは、悪い芸術とみなすべきである。（*Letters*, 291, 筆者訳）

上記引用部分では、モリスが社会主義者であることから作品にもその思想を読み取ろうとする批評に対して、『世界のかなたの森』には教訓的な意図は込めておらず、単なる空想の物語として描いたと反論している。たしかに、本作品は中世風の世界で魔術や小人が登場するなど、非現実的な設定で描かれているため、単なる空想の物語として読むこともできるだろう。しかし、このモリス自身の言葉を念頭に置きつつも、本作品をはじめとする晩年の散文ロマンスには、大きく分けて二つの見方がある。本業であるデザイナーとしての活動や社会主義運動などに共通する意識との関連性を読み取ろうとするものと、そうでないものである。

英文学者の小野（1986）は、『世界のかなたの森』を「空間的にも時間的にも、現実によってまったく限定されない、純然たる空想世界」（『モリス研究』, 300）と表現し、この作品

が非現実的で空想的な物語であることを強調している。また、この作品が書かれた頃、モリスは私設印刷所ケルムスコット・プレスのための活字デザイン、社会主義や芸術に関する講演、講演の原稿作成、政治集会など多忙な生活を送っていたことに触れ、本作品をはじめとする散文ロマンスは余暇に合間を縫って自分の楽しみのためだけに書かれたものであると論じている。たしかに、彼が本作品を執筆した頃の生活は決して余裕のあるものではなかっただろう。しかし、モリスは本作品を執筆しただけでなく、前述の通り自身が創設した出版所であるケルムスコット・プレスから刊行している。小野によると、モリスは製作する書物の物語の内容によって活字の書体を変えていただけでなく、字と字や行と行の間隔、印刷面の位置取り、縁の装飾、挿絵などにも強くこだわって書物を製作していた（『書物の宇宙』, 1986)。本作品も例外ではなく、自身がデザインしたチョーサータイプの活字が使用され、版面の位置なども彼が理想としていた形式で作られている。このように、『世界のかなたの森』には彼の書物に対する強い理想が込められていることから、多忙な生活にも関わらず時間を割いて作られたという点に、単なる自己満足的な意味以上の動機があったのではないかと推察される。

また、モリスの伝記の筆者であるヘンダースン（1990）は、ロマンス創作の動機を彼の不幸な結婚生活に見出している。モリスの妻であるジェイン・モリス（Jane Morris, 1839-1914）が、画家のダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ（Dante Gabriel Rossetti, 1828-1882）と愛人関係にあったことから、散文ロマンス全体に登場する、若く美しい女性はこの現実に対する「理想化による補償作用」（488）であるとしている。たしかに、現実の結婚生活において妻との関係がうまくいっていなかったことは、作中の女性の描き方に多少の影響が表れている可能性はある。しかし、伝記の中でヘンダースン（1990）は『ユートピアだより』と『ジョン・ボールの夢』（1888）は詳細に取り上げている一方で、『世界のかなたの森』を含むそのほかの散文ロマンスにはほとんど触れておらず、この指摘はモリス自身のプライベートと作品を安易に結びつけようとした推測であると考えられる。

モリスの散文ロマンスに、そのほかの活動にも通じる価値観が表れているとする研究の例として、英文学者の川端（2016）が挙げられる。彼はモリスのロマンス創作を「逃避的で自己満足的な営みとして、真剣にとりあげる必要がないもの」（19）として無視する見方が 19 世紀からあったと指摘し、モリスの晩年のロマンスを研究の対象として見てこなかった傾向に対して批判している。彼の本業はデザイナーであり、晩年には社会主義者として活動も行っており、当時の人々にとっては彼が晩年にロマンス執筆に注力したのは現実逃避に見えたのだと思われる。英文学者の木村（2019）は、モリスが『世界のかなたの森』に寓意的な意図はなかったと述べていることを念頭に置きつつも、ロマンス創作が彼の生涯の最期にあたることから、彼の思想の反映を読み取れる重要なものであるとしている。前述の通りモリスが多忙な生活の合間にロマンスを執筆していたことや書物そのものにも強くこだわっていたことを踏まえると、デザイナー、詩人、社会主義者など様々な方面で活躍した彼

が最晩年にあたる時期に散文ロマンスを執筆していることには、何かしらの意図があったとも捉えられる。

また、川端（2016）は、19 世紀に主流だった小説とは異なる形式であるロマンスを創作したとことに、「近代の支配的な趣味に真っ向から逆らう」（50）という点で、モリス商会やケルムスコット・プレスでの書物制作の活動と共通する価値意識が見られると論じている。たしかに、モリス商会では産業革命による機械の発達に対して低下した商品の質を危惧し、職人の手仕事を重視した製作を行っており、彼が当時の支配的な文化に対して批判的な見方を持っていたと思われ、この川端の指摘には妥当性があるといえよう。英文学者の森田（2009）もこの点について、モリスは大量生産されたヴィクトリア朝の書物に対して中世の装飾写本や初期印刷本を理想の書物と考えていたとし、モリスのロマンス創作とヴィクトリア朝に対する批判的な価値観が結びついていることを指摘している。また、英文学者のBennett(2003)も同様にモリスのロマンス執筆の背景を分析し、彼にとってそれは、芸術的・政治的な理想を伝える効果的な手段であったと論じている。散文ロマンスには同時代の英語ではなく古語が使用されていることと、小説ではなくロマンスという形式を採用したことにおいて、当時の支配的な文化に逆らうという意味で、執筆という行為自体が政治的な意図のある行動だったという。上記のことと、前述の通りモリスが時間的な余裕のない中で『世界のかなたの森』などを執筆し刊行していることや、それが最晩年にあたる時期であることを踏まえると、彼の散文ロマンスはやはり単なる趣味として見過ごすべきでないものと捉えることができるだろう。

本節では、先行研究において『世界のかなたの森』がどのような見方で論じられてきたのかを明らかにした。モリス自身はこの作品には教訓的な意図は込めていないと述べており、非常に多忙な生活の中で書かれたことや、彼の女性関係との関連から、先行研究において過小評価されてきた可能性があることを指摘した。一方で社会主義運動、書物芸術といったそのほかの活動に共通する意識を読み取る研究や、ロマンスという形式自体に意図的なものを見る研究者の見方から、『世界のかなたの森』を含むモリスの晩年のロマンスは、彼の活動に通じる重要な価値観が表れているものと解釈できることを示した。

第２節　女王の人物像と衣服

本節では、『世界のかなたの森』においてモリスの衣服に対する考えがどのように反映されているのかを明らかにするために、作品の重要人物である女王の人物像と衣服の特徴について分析する。そして、女王の人物像や衣服の描写を通して衣服がどのようなものとして描かれているのかを論じる。

まず、作中の女王の描かれ方から人物像を分析する。女王は魔術を操り、「世界のかなたの森」を支配する人物であり、熊族と呼ばれる人々に崇拝されている女神でもある。女王の描写について、本節では二点指摘したい。一点目として、女王は狡猾で恐ろしい人物として

描かれている。ウォルターが森へ向かう途中出会った女王の手下である小人は、「あれの手中に落ちれば、あれを美しいと思うだろう。そして後になって、そのことを後悔するだろう」（69）と女王の恐ろしさを語る。森に進んだあと、ウォルターは女王の奴隷であるメイドと出会い恋に落ちるが、そこでウォルターが陥っている状況について「あなたが踏み入っているのは、善を愛する何びとにとっても危険な土地」（79）と、忠告を受ける。この発言からはウォルターがいる森は危険な場所であることがわかり、前述の小人の言葉を踏まえると、それは女王の存在によるものであることが読み取れる。このように、女王は魔術で人を惑わせる恐ろしい人物として描かれていることがわかる。

二点目として、女王は自分より身分が低い人々を見下す人物として描かれている。女王はメイドのことを「強いられて女の仕事を私のためにする以外は、ほとんど役に立たぬ奴隷だ」（92）、「奴隷のことなど、いつもいつも心にかけてはおられぬ」（102）と語る。また、奴隷の印としてメイドの足首に鉄の輪を付けさせており、「それはその女が私のものということ、それに私が彼女なしにはいられぬということを示す印である以外何でもない」（108）と発言している。これらの言葉からは、メイドを自分の所有物として扱い印を付けることで、自分の地位を見せつけたいという意識があると推察できる。以上のことから、女王は身分の低い人を見下し、自分の権力や立場を誇示しようとする人物として描かれていることがわかる。

次に女王の衣服に着目して分析する。女王の服装の特徴として、その身分や美貌に相応しく豪華で美しい服装であることが読み取れる。ウォルターが旅に出発する前の港で、女王らの幻覚を目にした際は、「背の高い威厳にみちた貴婦人」（19）で、美しくあでやかな衣裳を着ていると描写されている。次にウォルターが幻覚を見る場面では、「この上なく美しく臈たけた貴婦人」（29）であり、「異教の女神のように美しく、ラングトンの町を二つ以上も買えそうな、いくつもの宝石を身に着けている」（29）と語られるように、ここでも豪華な服装を身に着けており、その華やかさが強調されている。その後森に進み、ウォルターが女王のいる黄金の館へ入ったときには、「たいへん美しく、贅沢な服装をし、かたわらに宝石をちりばめた剣を置き、頭には宝石のついた冠をのせていた」（90）と語られ、やはりこの場面でも女王の装いは美しく派手な印象であり、かつ宝石や黄金といった裕福さを思わせるものを身に着けている。また、ウォルターを魅了することに成功し関係を持ったあと、女王はウォルターを食事に誘うが、その前に服を着替えるよう命じる。「もう夜が来たようだから、そなたの部屋に行きなさい。（中略）そなたにふさわしい衣裳があるはず。それを身に着け、できる限り美しく装いなさい」（156）と伝え、ウォルターにも豪華な衣裳を着させ、自らは「壮麗無比の衣裳に身を固めた女王」（157）と語られる。ここでもまた女王は華やかな装いに身を包んでおり、ウォルターにも自分と食事をする場に相応しいように綺麗で派手な服装をさせていることがわかる。このことから女王は、自分の女王としての立場に見合った装いとして宝石などの豪華なものを身に着け、派手な服装をしていることが強調され

ていると思われる。
上記の人物像と衣服についての分析から、女王の描写において衣服はどのようなものとして描かれているといえるだろうか。前述の通り、女王は周囲から恐れられていて、自分の地位や権力を誇示しようとする人物像である。服装に関しては、美しく豪華な装いが複数の場面で強調されている。これらの点と、自分だけでなく一緒に食事をするウォルターにも豪華な服装をさせていることから、彼女の煌びやかな服装や宝石のついた装飾品は、自身の社会的地位を表すものとして描かれていると考えられる。
本節では、重要人物の一人である女王の描写を分析した結果、女王は冷酷で恐ろしく、身分の低い人々を見下す人物として描かれていることを示した。このことと、装飾が多く華麗な服装をしている様子が強調されていることを踏まえると、彼女の衣服は権力や地位を象徴するものとして描かれていると解釈できることがわかった。

第 3 節　メイドの人物像と衣服

本節では、『世界のかなたの森』に反映されているモリスの衣服に対する思想をさらに探るために、前節の女王に関する分析を踏まえて、作品のヒロインであるメイドの人物像と衣服の特徴について分析する。そして、メイドの描写を通じて衣服がどのようなものとして描かれているのかを論じる。
まず、作中のメイドの描かれ方から人物像を分析する。メイドは、勇気と知恵のある人物として描かれている。ウォルターはメイドに森で出会い恋に落ちるが、彼が森に来たのは女王の魔術による罠だったのであり、二人の関係が女王に知られないようにするためにメイドはある危険な計画を実行しようと提案し、「もし私たちが抵抗して戦いもしないで、成行きにまかせるなら、それより悪い状態はないでしょう」（84）と話す。この発言からは、自分たちの状況に受け身でいるのではなく、積極的に行動することで変えようとする意志の強さと勇気が読み取れる。また、メイドはもともと別の世界で奴隷のように過酷な環境下で働かされていたが、そこで出会った老人に、学ぶことと知恵を教えてもらったという。これについて彼女は「そのおかげで、とうとう私は賢くなりました。あえて申しますなら、どうすれば強くなれるかということに賢くなったのです」（180）と語っており、この発言からもメイドが現状の辛さに負けない勇気と賢さを持った人物であることが読み取れる。一方で、森から逃れる直前に小人が二人に襲いかかってくる場面で、メイドは「顔は死人のように真青になり、震えるあまり、ほとんど立ってもいられず、（中略）ただ口から、弱々しい意味の分からない声が出るだけであった」（167）と小人に対する恐怖心をあらわにしている。このことを踏まえると、メイドは敵を恐れる弱さも持っているものの、目的のために知恵を使い勇気を持って行動することのできる人物であると捉えることができる。
次に、衣服の描写の分析を行う。特徴的な点として、服装の選択に関する議論が描かれており、メイドの描写を通じてその答えが示されると解釈できることを指摘したい。危険な森

から逃げスターク・ウォール王国と呼ばれる城塞都市に進んだあと、二人は武装した男たちに連行される。そこでウォルターは身ぐるみを剥がされるが、メイドの服装をどのようにするか問われた際に、ウォルターは「その意思を聞き、そのとおりにしてやるがいい」(247) と、メイドの意思を尊重するように指示する。その後ウォルターのもとに現れたメイドは、「荒野の苦しみを勝ち抜いてきたあの白衣以外は何も、今でも身に着けていなかった。ただ頭の上には赤薔薇の冠をのせ、腰には同じ赤薔薇の花輪を巻いていた」(251) とあるように、王国に来たときのままの衣服を着ているのである。つまり、「その意思」(247) を問われたメイドが、豪華な服や美しい服ではなく、そのままの自分の服を着ることを選択したことが推察できる。前述の通りメイドが勇気と知恵を持つ人物であることを踏まえると、ここで自らの服を選んだことは、自分の意思を持ち貫こうとする彼女の勇気ある姿勢を示すものにもなっていると考えられる。

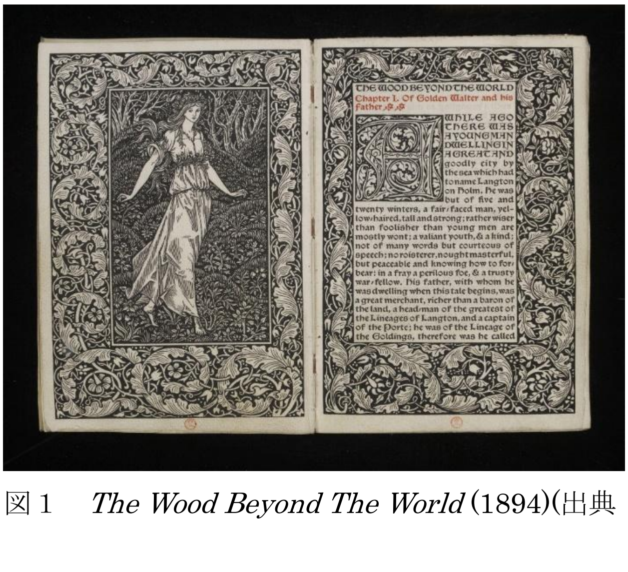
また、国の王と王妃となったウォルターとメイドの二人が国民の前に立つ場面において、ある国民の男性 2 人の会話が挿入されるが、ここではメイドの服装について議論する様子が描かれており、服装に着目して作品を分析する上で重要な場面であると考えられる。そのため、この場面でメイドの服装がどのように描かれているかを考察したい。群衆の前に立つウォルターとメイドの姿を見て、男性二人のうち一人は、「美しいお方だ。だが、身にまとうものは質素というには粗末すぎる」(256) と、メイドの服装の粗末さを批判しているが、そのあと王妃らしい衣装に着替えたメイドを「今度は王妃はそれにふさわしい装いをされていますわ。頭には王冠をかぶられ、いたるところ真珠で飾られた、金糸の入った白い絹織物を召されている」(258) と称賛している。これに対してもう一方の男性は、「あの方の着ているものといえば、白衣をまとって、薔薇の花を腰に巻いていられるだけだが、あの方の肌身そのものの全体が、どこまでも清く匂やかなので、身に着けているものすべてを清めて、その肌のほんの一部とさせてしまう」(256) と返答し、着ているものではなくメイド自身の美しさを評価している。つまり、この場面には、地位に相応しい衣服を着るべきであるという価値観と、着る人自身の魅力を重視する価値観の対立が描かれていると解釈できる。

英文学者の Nijibayashi(2011)は、メイドが王国全体に幸福と秩序をもたらす存在であり、彼女の身体は王国にとっての純潔さ、安らぎ、美しさ、神聖さの力の具現化であるとしている。そして上記の後者の男性の、メイド自身の美しさを評価した発言は、そうしたメイドのイメージを想起させると論じている。たしかに、「あの方が通り過ぎられた時、まるでパラダイスが私たちの都に訪れ、都中にその香りを漂わしたかのように思われました」(258) という国民の発言や、「彼女は土地の豊穣を約束するものであり、都の守護者でもあり、民衆の喜びのたねであった」(262) という語り手の言葉からも、王国においてメイドが豊かさや平穏、喜びをもたらす存在であることは窺える。しかし、上記の男性の発言のみから、王国においてメイドが無垢、平和、美、神聖さといったものを体現する存在であることを読み取るには不十分であり、この Nijibayashi の指摘は妥当ではない部分があるといえる。この場

面における議論は、王国におけるメイドの存在の象徴性を表したものではなく、その人の地位と衣服との結びつきに関する二つの意見の対立を描いたものであるといえよう。

この議論は、物語の最後のメイドの描写によって決着がつくと解釈できる。メイドは熊族たちを欺いたことを後悔し、償うために農夫たちを連れて耕作技術を教えに行く。この場面でのメイドの服装は「今もまた、「世界のかなたの森」から逃れた時と同じ、短い白い袖のないドレスを身にまとい、腕もむき出し、足も裸足であった」(263) と語られるように森から逃れたときと同じ服装をしているのである。メイドは王妃としての装いではなく、軽快な服装を自分の意思で選んでいると思われる。ここには、上記の二人の男性の議論の答えが示されていると解釈できるだろう。つまり、社会的地位に合った服装ではなく、その人自身の自由な選択としての衣服のありかたに価値が置かれていると考えられる。

最後に、メイドの服装として、軽装で植物をまとった様子が強調されているといえる。図１は『世界のかなたの森』の口絵に描かれているメイドと思われる女性のイラストである。頭に花冠をのせ、上半身や足に植物を巻き付けている様子や、その背後に植物が描かれていることから、これは熊族の国を切り抜けるために、彼らが崇拝する女神のフリをしてメイドが身体全体を花でまとった場面であると考えられる。このイラストは物語の最初に挿入されているが、この場面は物語の後半であるため、読者にはこの女性の正体はすぐにはわからない。また、前述の通り物語の最後のメイドの服装は裸足で腕を露出した、白い袖のないドレスと描写されており、このイラストと類似している。そのため、読者にはメイドの印象としてこの口絵の女性が強くイメージに残ると考えられる。つまり、この口絵のイラストには、メイドを裸足で軽やかな服装をした人物として印象付ける効果があるといえる。


THE WOOD BEYOND THE WORLD
Chapter I. Of Golden Walter and his Father

A WHILE AGO THERE WAS A YOUNG MAN DWELLING IN A GREAT AND goodly city by the sea which had to name Langton on Holm. He was but of five and twenty winters, a fair-faced man, yellow-haired, tall and strong; rather wiser than foolisher than young men are mostly wont; a valiant youth, & a kind; not of many words but courteous of speech; no roisterer, nought masterful, but peaceable and knowing how to forbear: in a fray a perilous foe, & a trusty war-fellow. His father, with whom he was dwelling when this tale begins, was a great merchant, richer than a baron of the land, a head-man of the greatest of the Lineages of Langton, and a captain of the Porte; he was of the Lineage of the Goldings, therefore was he called

図１　*The Wood Beyond The World* (1894)(出典：V&A)

上記の分析を踏まえると、メイドの描写を通して衣服はどのようなものとして描かれているといえるだろうか。勇気と知恵のあるメイドは、どのような衣服を着るかを自分の意思

で選択している。加えて、王妃に相応しい衣装に着替えさせられるものの、最後には捨て、もとの服装に戻る。そして、最後に選択したメイドの服装は、肌の露出があり軽やかな様子が強調されている。これらの描写から、メイド自身が地位と結びつく衣服のありかたを拒絶しており、煌びやかな服装よりも、自らが選択した軽快な恰好を好んでいると捉えることができる。つまり、衣服は社会的地位に縛られない自由な自己表現の手段として描かれているといえる。

本節では、メイドの描写を衣服に着目して分析した結果、メイドは勇気と知恵を持ち、自らの意思で身に着けるものを選択できる人物として描かれていることを指摘した。そして、自由な自己表現を可能にするものとして衣服が描かれており、それは装飾の少ない簡素なものであることを示した。

本章では、『世界のかなたの森』に対する先行研究の解釈を確認した上で、女王とメイドという女性キャラクターの人物像と衣服の特徴を分析した。その結果、本作品がほかの活動にも通じるモリスの価値観が反映された重要なものであることが確認できた。そして、女王の装いは社会的地位を象徴するものとして描かれている一方で、メイドの衣服は地位に囚われずに自由に選択できるものとして描かれていることが明らかになった。また、身に着ける衣服についても対照的に描かれており、女王は華やかで装飾が多いのに対して、メイドはシンプルで簡素なものであることを指摘した。

第 2 章『ユートピアだより』作品分析

本章では、前章で指摘した『世界のかなたの森』における衣服の描写が同じ作者の異なるジャンルの作品ではどう描かれているかを比較するために、『ユートピアだより』の作品分析を行う。まず、作品が書かれた 19 世紀の女性たちの衣服の特徴を確認し、本作品における当時の衣服の描かれ方を考察する。次に、作中に登場するクレアラとエレンという二人の女性キャラクターを衣服に着目して分析する。そして、本作品において衣服がどのようなものとして描かれているのかを論じる。

第 1 節　ヴィクトリア朝の人々の衣服に対する価値観

本節では、『ユートピアだより』における女性の衣服の描写を分析するために、ヴィクトリア朝の女性たちの服装について確認する。衣服と社会的地位との関連性や、コルセットの着用を巡る当時の規範についての先行研究を整理し、当時の女性の衣服について考察する。そして、本作品の衣服の描写において、19 世紀の状況がどのように描かれているかを分析する。この作品にはモリスが目指した理想が実現された 22 世紀のイギリス社会が描かれているため、当時の人々が服装に関してどのような価値観を持っていたかを理解することは重要であると考えられる。

ヴィクトリア朝では、人々が着る服は社会的地位に相応しいものであるべきと考えられていた。社会学者の坂井（1997）は、ヴィクトリア朝のミドルクラスの女性たちに白いウェディングドレスが定着した過程を分析する中で、特にヴィクトリア朝初期、中期には女性たちはそれぞれの地位に合わせてウェディングドレスの色や装飾品を選ばなければならなかったと論じている。当時、花嫁がウェディングドレスについて雑誌の編集者に問い合わせることは珍しくなく、牧師補に嫁ぐ女性が高価な白いドレスとレースを希望していることに対して、ミドルクラス向けのファッション誌である『イングリッシュウーマンズ・ドメスティック・マガジン』（*The Englishwoman's Domestic Magazine*）の編集者は、身分不相応だと指摘し、実用的な色物のドレスを推奨しているという。白いウェディングドレスは高価なものであり、結婚式当日のためだけに購入できるのは一部の裕福な花嫁に限られ、多くの花嫁は結婚式後も着用可能で実用的なドレスを選択しなければならなかったのである。また、花嫁は結婚式を境に父親から夫の所有物になると考えられたため、彼女たちのドレスは父親と夫の権威を象徴するものであり、彼らの財産に合ったものを選ばなければならなかったとされている。もし裕福でない花嫁が身分以上の豪華なドレスを選んだ場合には、道徳的でないとして非難されたという。それは、男性の社会的地位を象徴する存在であるはずの女性が豪華なドレスを着ることで、男女間の主従関係が崩れてしまうからであり、女性たちはそうした社会的な圧力により身分以上に豪華なドレスを着ることは許されなかったとしている。上記のことから、ヴィクトリア朝では社会的地位に合ったものを身に着けるべきと考えられており、特に女性にとってそれは重要な問題であったことが窺える。

『ユートピアだより』には、身分によって着るものを選ばなければならなかった 19 世紀の女性の衣服のありかたが否定されるべきものとして描かれている。ゲストは、テムズ川の上流を目指す中で、ある老人の家に泊まることになるが、その老人は過去の時代を賛美する価値観を持っているために未来社会の中で奇異な存在として見られている。エレンという彼の孫娘について、ゲストの視点では「顔も手もむきだしの足もこんがりと日に焼けている。（中略）非常に軽装なのは貧しいからではなく、明らかに好きでそうしている」（275）と肯定的に語られるが、老人は「エレンみたいなうら若い美女は、昔でいえばさしずめ貴婦人といったところで、いまみたいに、絹の襤褸（ぼろ）を着なくてもよかったろうし、こんなふうに日に焼けなくてもよかったろう」（282）とエレンの装いを否定している。ここには、19 世紀であれば貴婦人として上質な服装をしていたはずのエレンが、その身分に相応しくない軽装をしていることに対する老人の嫌悪感が読み取れる。しかしこの老人の発言は、クレアラの「この人はこの美しい季節にふさわしく、すてきな服を着ていらっしゃるじゃないですか」（282）という言葉によって否定されている。つまり、19 世紀の価値観を保持する老人にとって女性は身分相応の装いをすべき存在である一方で、そうした考えは未来社会では一般的ではなくなっていると考えられる。

木村（2017）は、『ユートピアだより』において 19 世紀の衣服と階級の繋がりが描かれていることを別の視点から論じている。ゲストの視点で語られる未来社会の人々の描写を通じて、階級制度が存在する 19 世紀と存在しない未来社会の衣服の在り方の対比が読み取れると指摘している。ゲストは、船方のディックの服装を「私がこれまでに見た現代の作業着とは似ても似つかず、14 世紀の風俗画の衣裳にでも使えそうなものだった。（中略）とびきり男ぶりのいい洗練された青年紳士に見えた。船方なんて酔狂でしているにちがいない」（21-22）と語り、服装と職業の不一致に違和感を抱いているが、これは衣服から階級を読み取ろうとする 19 世紀的な価値観を保持しているからであるという。本稿もこの解釈に従い、衣服と社会的地位が密接に結びつくと考えられた 19 世紀とは反対に、本作品ではそうした価値観からは解放された社会が描かれていると考える。そして、それは女性にとっても同様であり、階級や社会的地位に縛られずに衣服を選択できるようになっていると思われる。

次に、19 世紀のイギリスにおいて一般的に着用された女性用補正下着であるコルセットについて分析する。女性たちの多くがウエストのラインを矯正する目的でコルセットを着用しており、これはヴィクトリア朝の衣服に関する慣習の中で特徴的なものであると思われる。美術史学者の Roberts(1977)は、コルセット着用がヴィクトリア朝において男性に従属的な女性像を作り上げたと指摘し、その背景には、女性に求められた道徳的な規範があったとしている。女性がコルセットでウエストを締め上げるタイトレーシングは、自己抑制の証であり、道徳的な義務であったと指摘している。コルセットを着用する女性は自分自身を尊重し気を遣うことができるとみなされた一方で、着用しない女性はだらしないと非難さ

れたという。このように、ウエストを締め付けることによる健康被害が一部の医者によって警告されていたにも関わらず女性たちがコルセットを着用した理由の一つには、社会が彼女たちに求めた道徳的な規範があったとしている。

坂井（2019）も自己抑制の重要性がコルセットの着用の議論に持ち出されたことを指摘しているが、Roberts(1977)の指摘と異なるのは、タイトレーシングに反対する者と賛成する者のどちらも道徳性を意見の根拠としたと説明している点である。『イングリッシュウーマンズ・ドメスティック・マガジン』内で 1867 年から 1874 年の間に巻き起こったコルセット論争において、タイトレーシングへの反対論者の多くは、コルセットは中身の伴わない外見だけの飾りであると同時に、健康を損なう悪習であり道徳的でないと主張したという。一方で、賛成意見の多くは、自身の経験談から、理想のウエストを手に入れることで周囲の人から褒められ、達成感が得られると語っているという。坂井はこの賛成意見の信憑性の低さを指摘しつつも、タイトレーシングがレディーになるために必要な訓練と捉えられていたことを特筆すべき点として挙げている。女子は家庭や寄宿学校での教育の中で、身体を補正する訓練を受け美しい容姿を手に入れることに、自己鍛錬の喜びを感じていたとされる。それは、ミドルクラスの女性たちにとって安定した生活のために結婚が重要であったことが背景にあるとしている。タイトレーシングによってウエストを細くして美しい外見を手に入れ結婚することができるならば、多少健康を犠牲にしたとしてもやむを得ないことだったのである。以上のことから、ヴィクトリア朝のミドルクラスの女性たちにとって、コルセットは達成感と美しさを与えてくれるものであったと同時に、社会の道徳的な規範として避けられないものであったと考えられる。

『ユートピアだより』には、19 世紀の女性たちが強いられたタイトレーシングを想起させる描写がある。ゲストは未来社会の人々がみな上質な服を着ていることに触れ、「かれらの衣服の色合いばかりでなく、そのかたちも美しくかつ理にかなっている」(257)、「その服は、体を締め付けたり、ゆがめたりせず、やわらかくつつみこむような具合になっている」(257)と彼らの服装を称賛している。ゲストは 19 世紀から訪れた存在であるため、その視点には 19 世紀の状況と比較した未来社会の様子が描かれていると考えられる。つまり、上記の語りは、ゲストが 19 世紀の人々の服装と比較した上で未来社会の人々を評価したものである。このことを踏まえると、「体を締め付けたり、ゆがめたりせず」（257）という言葉には、女性たちが健康を犠牲にしてコルセットを着用しなければならなかった 19 世紀の社会に対する批判的な姿勢が反映されていると解釈できる。

本節では、ヴィクトリア朝の女性の衣服について考察した。女性にとって身に着けるものは社会的地位と切り離せないものであったことと、道徳的な規範によってタイトレーシングは避けることのできないものであったことを確認した。そして『ユートピアだより』には、そうした当時の状況を否定的に捉えて批判していると解釈できる描写があることを指摘した。

第 2 節　クレアラの人物像と衣服

本節では、『ユートピアだより』における女性の衣服のありかたをより具体的に明らかにするために、主要な女性キャラクターであるクレアラの人物像と衣服を巡る彼女の発言を分析する。そしてクレアラの描写を巡って衣服がどのように描かれているのかを論じる。

まず、クレアラの描写を分析する。クレアラはディックと恋愛関係にあり、その描写を通じて未来社会の価値観や男女間の関係性を読者に示す存在として描かれている。ディックの曾祖父であるハモンド老人によると、クレアラはディックと夫婦関係にあり子供もいたが、クレアラが別の男性に恋をしたことで一度別れているという。しかし長くは続かず再びディックのもとへ戻ってきたのである。木村（2018）は、クレアラとディックの関係性について、自由に結婚して別れまた戻ってくるという点で女性であるクレアラが主体的に行動していると指摘し、「ヴィクトリア朝のものとは異なる関係性を築き上げている」（33）としている。それは、未来社会には私有財産が存在しないため結婚に財産が絡まないことや、男女間の不平等が解消されていることが背景にあるとされている。現代史学者の Thomas(2024)も同様に、一夫一妻制や 19 世紀に一般的だった抑圧的な結婚制度に代わる選択肢を提示しているという点で、クレアラとディックの関係性が進歩的であることを指摘している。これらの主張に従うと、クレアラの描写を通して、結婚が自由にできるという意味で選択的な立場にある未来社会の女性のありかたを読み取ることができる。加えて、クレアラの登場以前に具体的な男女の関係が描かれていないことや、彼女の話をきっかけにゲストとハモンド老人が未来社会における恋愛や女性の地位について話し始めることからも、恋愛をはじめとする女性のありかたがクレアラを通してはじめて示されるといえるだろう。以上のことから、クレアラは未来社会の女性の立場を読者に示す存在であると考えられる。

次に、クレアラの描写を衣服に関する発言に着目して分析する。衣服を巡るクレアラの言葉として特徴的なのは、第 19 章「ハマスミスまでの帰り道」で繰り広げられるゲストとの会話であり、そこには生活における美しさを求める未来社会の価値観が読み取れる。ゲストは、自らが見慣れた 19 世紀の人々の暗い色の服装と比較して、未来社会の人々が華やかな服装していることについてクレアラに話している。これに対して彼女はむっとしながら「あら、いけませんか？みんななにかよごれる仕事にかかっているわけじゃないわ（中略）服が汚れることはありません。そら、みんなとてもきれいじゃありませんか。けばけばしくはないでしょう」（255）と不機嫌な様子で返答する。この発言からは、人々の華やかな服装が評価できるものであり、わざわざ説明するほどのことではないとクレアラが認識していると解釈できる。

続けて、ゲストが未来社会の人々がみな高価な服を着ていることについて、どうしてそんなに余裕があるのかと尋ねたときのクレアラの返答にも同様の価値観が読み取れる。クレアラは「そうしたければみすぼらしい服を着ることだってできるわ―そんなことをしたらま

わりの人の気分を害するかもしれない、というふうに考えなければ」(256)、「わたしたちの体が美しいのと同様に、体を覆うものも（中略）美しくしたいと思うことに、なにかまちがいがあるとお考えなのでしょうか」(257）と発言し、粗末な服を着るのも個人の自由としつつも、美しい服を着ることを当然のことと考えている様子が読み取れる。この場にはクレアラとゲストのほかにディックもいたが、ディックが彼女の発言を否定することなく黙っていることからも、クレアラの言葉は彼女個人でなく未来社会の人々が共有する価値観を示しているものと捉えることができる。また、クレアラがゲストの服装を「おかしな服」(256）と呼び、出会った人に困惑させてしまうから着替えさせようとすることからも、人々は美しい服を着るべきと考えており、それは未来社会において一般的な考えであると推察される。このように、衣服に関するクレアラの発言には人々が華やかで美しく装うことを当然とする価値観が表れており、それは未来社会の人々の間で共通の考えであると思われる。

またクレアラは、女性が身分に合った服装を着るべきであるという考えに対して否定的な価値観を持っているとみられる。前節で論じた通り、過去の時代の価値観を保持する老人が 19 世紀であればエレンは軽装をしなくて済んだと話すのに対して、クレアラは「この人はこの美しい季節にふさわしく、すてきな服を着ていらっしゃるじゃないですか？」(282）と反論しエレンの服装を擁護している。これはクレアラがエレンに対して羨ましさを感じていたことからくる発言とも捉えることができるが、上記の老人に対する反論は、「これまで口をつぐんでいたクレアラが口をはさんだ」(282）と強調されているため、クレアラ自身が老人の旧時代的な価値観を否定的に捉えており、それは彼女にとって強く主張すべき点であったと解釈できるだろう。このようにクレアラは、女性の衣服と社会的地位を結びつける考え方を否定すべきものと捉えていると考えられる。

クリエイティブライティングを専門とする Campbell(2007)は、階級制度がなくなり人々が平等に暮らす『ユートピアだより』の世界において、服装は個人の趣味の体現であると論じている。その根拠として、掃除人のボフィンがたくさんの黄金を身につけた派手な服装を好むことが尊重され、ハモンド老人の着古した青いサージのジャケットが受け入れられていることを挙げている。たしかに、「町育ちのお嬢さん」（287）と語られるクレアラが、エレンの軽装をまねて「うすぎぬをまとっただけの軽装で、履物も軽いサンダルをつっかけただけで、素足」（287）という服装に着替える描写からも、個人が好きな服装を選択することができると考えられる。このことと、クレアラが階級と衣服を結びつけることに否定的であることを踏まえると、彼女は社会的地位に囚われずに個人が自由に選択できるものとして衣服を着ていると解釈できる。

クレアラの人物像と衣服についての以上の分析から、クレアラの描写を通して衣服は、美しく、階級に囚われずに個人の意思で選択できることが理想として描かれていると考えられる。そして彼女が未来社会における女性の立場を示す人物であることを踏まえると、この考えは、クレアラ個人ではなく未来社会の人々の一般的な価値観を表しているといえる。

本節では、『ユートピアだより』の女性キャラクターであるクレアラの描写を分析した。その結果、クレアラにとって人々が美しく装うことは自然なことであり、どんな服を着るかは社会的地位に囚われることなく自由に選択できるものであることが明らかになった。また、こうした価値観はクレアラ個人ではなく、未来社会全体の価値観を示すものであると考えられる。

第3節　エレンの人物像と衣服

本節では、『ユートピアだより』における主要女性キャラクターの一人であるエレンの人物像と衣服に関する描写を、前節のクレアラについての考察を踏まえて分析する。そして、エレンを通じて衣服がどのようなものとして描かれているのかを明らかにする。

エレンはラニミードのコテージに暮らす20歳の女性であり、彼女の衣服を分析する前提として、どのような人物として描かれているかを分析する。彼女は19世紀に対して批判的な考えを持つ人物であることが読み取れる。彼女の祖父が現在の暮らしに対する不満を口にすると、エレンは「昔がいいって言ったって、わたしの知る限りじゃ、あなたみたいなお人好しで物ぐさな老人は、飢え死にしかけるか、さもなきゃ人々から食料と衣類と住居を強奪するために、兵士やそのほかの人にお金を支払わなければならなかったでしょうね」(278)と反論し、過去の時代に生きるよりも今の世界を大事に生きるべきだと主張する。この発言からは、昔の時代を賛美する思想を持つ祖父がいながらも、過去の時代の人々の暮らしが幸福なものでなかったことを批判するエレンの考えが読み取れる。同様に、19世紀と22世紀の時代の変化についての議論の際、エレンは「祖父が言うような大邸宅がたくさんあった昔の時代だったら、わたしたちは否が応でもコテージで暮らさなくちゃいけなかったんだわ。（中略）服だって見るからにお粗末できたならしいものだったのでしょう」（292）と発言し、過去の時代の暮らしぶりを批判している。このように、エレンは19世紀の人々の生活を否定的に捉えていると考えられる。

加えて、エレンは22世紀の社会を称賛する人物であるといえる。上記の「服だって見るからにお粗末できたならしいものだったのでしょう」(292）という発言において、好きな服を選ぶことはできず貧しさ故に質素な服を着ざるを得ない19世紀の状況を否定的に捉えていると読み取ることができる。この発言に続けてエレンは、昔の時代に生きていたら不幸な環境のせいで痩せ衰えていただろうとした上で、「したいときに一生懸命働くわ。それが好きだからだし、わたしのためにもなるから。体がひきしまるし、見た目にもずっと美しくなる。いっそう健康に、幸福になるのだから」(293）と現在は働くことで見た目を整えることができると語っている。これは未来社会で仕事が人々にとって喜びのあるものとなっているためであるが、前節で論じたように服装を美しくすることを当然とするクレアラの考えと重なる。このことからも、エレンは人々が美しく装うことのできる未来社会を肯定的に考えていることが読み取れる。このように、エレンは19世紀の人々の生活を否定的に捉えて

おり、貧しさ故に貧相な服装をせざるを得なかった当時とは反対に良質な服を着ることのできる22世紀の社会を称賛する人物であると解釈できる。

次に、上記の人物像を踏まえた上で、エレンの衣服がどのように描かれているかを分析する。まず、エレンは前述の通りほかの未来社会の住人と同様、人々が見た目を美しくすることを当然と考えており、自身も華やかで美しいものを着ているといえる。第27章「上流」では、ゲストの視点で「舟におとらずに明るくはなやかな服を来た人物」(331)、「すらりとした娘で、うす青色のシルクを身にまとい、その服が橋を吹き抜ける風になびいている」（331）と語られている。ここでは、明るい緑色をした舟と比較してエレンがうす青色の華やかな服装をしていることが描写されている。前述の通り、見た目を美しくするために働くと彼女が発言していることを踏まえると、美しい服装をすることを重要視する価値観によって、自身の服装も華やかなものになっていると解釈することができる。

また、エレンの描写を通して、未来社会において人々が自ら着るものを選択できるようになっていることが示されていると考えられる。第22章「ハンプトン・コートと過去の賛美者」において、エレンの外見はゲストの視点で以下のように語られている。

> 髪は薄い色（金髪）で、目はグレイ、顔も手もむき出しの足もこんがりと日に焼けている。コテージに住む人にわたしが出会ったのはこれが初めてだが、非常に軽装なのは貧しいからではなく、明らかに好きでそうしている。というのは、ガウンはシルク地で、両手首につけているブレスレットはとても高価そうに見えるからだ。（274）

上記引用場面で、エレンが軽装なのは暮らしが貧しいせいではなく、「明らかに好きでそうしている」(274)と彼女自身の選択であることがゲストの視点で強調されているといえる。エレンはコテージに住んでいるが、訳者の川端（2013）によると、コテージとは19世紀のイギリスでは下層農民を連想させるものであるという。つまり、「昔であればわたしは貧民の一人だったはず」（376）というエレンの言葉のように、彼女は19世紀であれば下層階級の暮らしをしているはずであったが、22世紀の未来社会ではそうではなくなっているのである。このことと、エレンが過去の時代に生きていたら貧しい暮らしで粗末な服装をせざるを得なかっただろうと語っていることを踏まえると、上記の場面では、19世紀とは異なり自らの意思で着る服を選ぶことができる未来社会の様子が示されていると思われる。

加えて、エレンの軽装は19世紀の女性たちの服装の過剰さと対照的なものとして描かれていると考えられる。木村（2017）は、エレンは19世紀的な服装とは全く異なる趣味を示していると指摘している。第3章「ゲストハウスとそこでの朝食」においてゲストが未来社会で初めて女性たちを目にしたとき、「いろいろな服飾品でごてごて身をつつんではいない。女性らしい装いで、現代の大半の女性とちがって、肘掛け椅子のごとく詰め物をしてはいな

い」(33) と、身体のシルエットを強制的に変えて過剰に装飾をした 19 世紀の女性たちの装いを批判しているが、エレンの服装はそれとは対極的なものであるという。たしかに、彼女の服装はゲストの視点で「その服が橋を吹き抜ける風になびいている」(331) と描写されていることからも、身体を自然な形で軽く覆うものになっていると捉えることができ、19 世紀の女性たちの服装とは異なるといえる。また、これは「布地はこの季節にあわせてうすくはなやかなもの」(33) とされる未来社会の女性たちも同様であり、簡素さという点で、エレンを含め 22 世紀の女性たちは 19 世紀の多くの女性たちとは異なる服装をしているといえるだろう。このように、エレンの服装には 19 世紀の流行のように身体のシルエットを人工的に変えるような強引さはなく、ヴィクトリア朝の女性たちとは対照的に自然に体をまとう簡素なものとして描かれていると考えられる。

エレンの人物像と衣服についての以上の分析から、衣服は美しくあるべきであるだけでなく、自らの意思で選択できるものとして描かれていると思われる。また、そうして彼女の意思で選択された衣服は、過剰な装飾や貧しさゆえの質素さはなく、華やかでかつ自然なものとなっているといえる。

本節では、『ユートピアだより』の女性キャラクターであるエレンを衣服に着目して分析した。その結果、美しくあることと、階級に関係なく自ら選択できることが理想として示されていることを指摘した。また、エレンの衣服が、美しくありながらも簡素で軽やかなものであり、それは 19 世紀の多くの女性たちや粗末な服装をせざるを得なかった人々とは異なるものであることを示した。

本章では、『ユートピアだより』において 19 世紀の女性たちの衣服がどのように描かれているかを確認した上で、クレアラとエレンという女性キャラクターの衣服について分析した。その結果、本作品では女性たちが社会的地位や道徳的規範から着るものを選ばざるを得なかった 19 世紀の社会に対して、階級に縛られることなく自由に衣服を選択する様子が描かれていることが明らかになった。また、人々が身に着けるものは美しくあるべきとされると同時に、19 世紀の女性たちに見られたような装飾の過剰さはなくなり、簡素なものとして描かれていると指摘した。

第 3 章　ウィリアム・モリスと衣服

本章では、ウィリアム・モリスの衣服に関する思想について考察する。まず、モリスの衣服に対する考えを確認するために、講演「生活の小芸術」における女性の衣服についての発言を、前章の『ユートピアだより』の分析を踏まえて検討する。次に、モリスの衣服に対する考えが形成された背景を探る手がかりとして、19 世紀イギリスの女性の衣服改良の議論とモリスの思想との関連性について論じる。最後に、第 1 章と第 2 章で行った『世界のかなたの森』と『ユートピアだより』の比較分析を行い、『世界のかなたの森』においてモリスの思想がどのように反映されているのかを明らかにする。

第 1 節　講演におけるモリスの衣服に対する価値観

本節では、前章で行った『ユートピアだより』における女性の衣服に関する考察を踏まえて、1882 年の講演「生活の小芸術」におけるモリスの女性の衣服についての直接的な発言を分析する。そして、モリスが女性の衣服に関して何を重要視していたのかを明らかにする。

モリスは、女性の衣服に関して、選択の自由があるという点を最も重視していたと考えられる。1882 年の講演「生活の小芸術」（The Lesser Arts of Life）において、モリスは労働において精神的な喜びを得ること、日常生活で使用するものを芸術作品のようにすることの必要性を導入で語ったうえで、建築芸術や陶芸、ガラス芸術などについて論じる最後の項目で衣服について語っている。彼は近代におけるイギリスの女性の衣服の変遷について語る中で、1852 年から 1872 年のイギリスにおいて、スカートを膨らませるための下着であるクリノリンやコルセットが流行した時期を批判している。一方で、講演が行われた当時の 1882 年は衣服の選択において自由があるという点で一部評価できるとして、女性が簡素で美しい服を着ていても街中でとがめられることがないことを例に挙げている。第 2 章第 1 節で論じた通り、19 世紀のイギリスにおいて女性たちは道徳的な規範や社会的地位によって着るものを選択しなければならなかった。しかし、英文学者の志渡岡（2020）によると、1880 年代はイギリスにおいて健康を害するコルセットに対する懸念から、女性の衣服改良の議論が本格化した時期であるという。モリスが評価した 1882 年前後はこの議論が活発化した時期と重なることから、19 世紀後半に女性の衣服の選択肢が広がったことを評価していると考えられる。このことから、モリスは女性が着るものを自由に選択できることを特に重視していたといえる。

また、モリスは女性の身体を不自然にゆがめたり人工的に形を整えたりするものに対して否定的であったといえる。女性が身に着けるものを自由に選択する方法について、モリスは講演で以下のように語っている。

> その自由を守る唯一の手立ては、衣装に対する不自然で醜怪なものの押し付けに抵抗することです。衣服は人体を覆うものであり、体を戯画化したりその輪郭線を

消し去ってしまったりするものではありません。身体は優美に覆われるべきで、袋に縫い込められたり、箱に詰め込まれたりするものでもないのです。(『小さな芸術』, 289)

上記引用部分において、鈴木（2007）も指摘しているようにコルセットなどによって身体のラインを人工的にゆがめることが当然とされていた当時の流行の衣服について否定的な見解を述べていると解釈できる。これは第 2 章で論じた通り、『ユートピアだより』においてゲストの 19 世紀と未来社会の衣服を比較する語りによって繰り返し批判されるだけでなく、エレンやクレアラの描写によって、身体を軽快にまとう服装が理想的なものとして示されている。また、上記の発言に続いてモリスは、「ご婦人方には、ご自分を肘掛椅子の詰め物のように扱われることは拒み、女性らしくゆったりと着こなしていただくことを切に願います」(『小さな芸術』, 290）と女性たちに直接警告をしている。これは『ユートピアだより』でゲストが 19 世紀の女性たちの服装を「肘掛椅子」（33）と例えて批判する際と同様の言い回しが使われている。このことからも、モリスは身体を無理にゆがめ、人工的に矯正するような服装ではなく、簡素で身動きのとりやすい衣服を理想としていると思われる。

本節では、1882 年の講演「生活の小芸術」においてモリスが女性の衣服について語っている内容を分析した。その結果、自らの意思で衣服を選択することを重要視していることが明らかになった。また、モリスは女性が社会的な規範によって身体をゆがめるような衣服を強制されることに否定的であり、シンプルで身体をゆったりとまとうような服を理想としていることを示した。

第 2 節　衣服改良を巡る動き

本節では、前節で確認したモリスの衣服に関する考えを踏まえて、19 世紀後半にイギリスで起きた女性の衣服改良の議論について確認する。そして、モリスの思想とその衣服改良の動きとの関連性を分析し、モリスの衣服についての考えが形成された背景について論じる。

第 2 章第 1 節で論じた通り、19 世紀の女性たちは階級や社会的な規範によって衣服を選択しなければならなかったが、同時に 19 世紀後半はイギリスにおいて女性の衣服が大きく変化した時期でもあった。前述の通り志渡岡（2020）によると、1870 年代にイギリスで流行したタイトレーシングについて、女性の健康への懸念から衣服改革の必要性が議論されるようになった。それは 1880 年代に本格化し、1881 年に合理服協会（The Rational Dress Society)、1890 年には健康・芸術的衣服同盟（The Healthy and Artistic Dress Union)、1898 年には合理服連盟（The Rational Dress League）が創設されたとされている。実際に団体が設立されるほどに、当時の女性の服装を巡る問題は大きな議論の的であったと考えられる。志渡岡は、こうした衣服改革の動きをさらに推し進めたのが、少女の健康を重視す

る国家政策によって女子教育の現場で体育・スポーツが推奨されたことと、1880 年代の自転車の流行によって女性の活動範囲が広がったことであると説明している。家政学者の米今（2008）も同様にタイトレーシングへの批判や女性のスポーツへの参加を衣服改良の動きが起きた要因としており、加えて高等教育を受ける機会の拡充や家庭教師として働く女性の増加によって女性の生活スタイルが大きく変化したことも背景にあるとしている。このように、19 世紀後半は、様々な背景から女性の衣服を改良せざるを得なくなり、それまで行われていた議論が具体的な団体の活動として顕在化した結果、女性の衣服改革に注目が集まったと考えられる。

モリスが 19 世紀後半の女性の衣服を巡る動きに影響を受けていると指摘する研究者もいる。木村（2018）は、『ユートピアだより』における女性の衣服の描写は女性の衣服改良の動きに影響を受けた可能性があると論じた上で、モリスと衣服改良の動きとの関連性を示す根拠として、合理服協会などの団体にモリスと関わりのあった人物が参与していたことを指摘している。合理服協会には作家で唯美主義者のオスカー・ワイルド（Oscar Wilde, 1854-1900）が、健康・芸術的衣服同盟には画家のワッツ（G.F.Watts, 1817-1904）やガラスデザイナーのヘンリー・ホリデー（Henry Holiday, 1839-1927）、挿絵画家のウォルター・クレイン（Walter Crane, 1845-1915）といった 19 世紀のイギリスを代表する芸術家やデザイナーが関わっていたという。木村は特に、モリスとオスカー・ワイルドが直接交流を持っていたことを取り上げ、二人の関連性を指摘している。たしかにワイルドはモリスと交流のあった人物であり、川端（2012）も二人が双方に影響を与え合う関係であったことを論じているが、モリスがどの程度ワイルドの衣服に関する活動や思想を知っていたのかは不明であり、必ずしも影響があるとは言い切れない。

しかし、ワイルドが参加していた合理服協会の活動目的と『ユートピアだより』に表れている衣服に関するモリスの考えに類似点があるという点には説得力があるといえる。米今（2008）によると、合理服協会の活動目的は、個人の自由な選択の結果としての合理的な服の着用を広めることだったという。その合理服な服とは、健康的、快適で、美しい服と考えられており、反対に非難すべきものとして考えられていたのは、コルセットやヒールが高くつま先が尖った靴、クリノリンといった 19 世紀の流行の服であったとされている。体型を人工的に変形させたり、動作を妨げたりすることなく、着用者の身体に合った服が必要とされていたと思われる。第 2 章第 1 節で論じたように、『ユートピアだより』には身体を無理に歪めるような 19 世紀の女性たちの服装が否定的に描かれており、こうした当時の流行に対する批判的な価値観は、前述の合理服協会の活動理念とも一致する部分があると考えられる。加えて、前節で示した通りモリスは 1882 年前後の衣服に関するイギリス社会の状況を選択の自由があるとして一部評価しており、これは女性の衣服改良の議論が活発化した時期と重なるといえる。このことからも、モリスは 1880 年代以降にイギリスで本格的に議論された女性の衣服の問題に少なからず影響を受けていると思われる。

一方で、必ずしも1880年代から本格化した衣服改革の動きをきっかけにモリスが女性の衣服に関心を持ったとは言い切れない側面もある。家政学者の鈴木（2007）は1890年に設立された健康・芸術的衣服同盟を中心に分析し、木村（2018）と同様にモリスと衣服改革の動きとの関連性を指摘している。鈴木は、健康・芸術的衣服同盟の構成メンバーにモリスと関わりのある人物がいたことを根拠に挙げ、モリスが女性の衣服について直接言及するようになったのは19世紀後半に衣服改良の動きが起きた頃であるとしている。加えて、1859年前後から 1860 年代にかけて妻のジェインをモデルにドレスを多くデザインしていたことを指摘している。それは中世の裁断方法を真似たドレープ豊かなドレスであり中世趣味が表れているとし、これが後に執筆されることになる『ユートピアだより』で未来社会の女性たちの衣服が中世風に描かれていることに繋がるとしている。たしかに、モリスが実際にドレスを自ら製作していたことには、本作品を執筆する以前からモリスが女性の衣服に関心を持っていたことが推察される。しかし、ドレスのデザインをしていたという1859年前後と本作品が執筆された1890年の間には時間的な隔たりがあるため、モリスが本作品で明確に19世紀の女性たちの流行の服装を批判していることとそれ以前にドレスのデザインを行っていたことを安易に結びつけるのは適切ではないと思われる。

では、モリスはどういった背景からドレスの製作を行っていたのだろうか。図2はモリスの唯一の絵画作品である「王妃グウィネヴァ」（*La Belle Iseult*, 1858）である。西洋服飾史学者の能澤（1988）は、ここに描かれている中世風のドレスを着たグウィネヴァの服装を分析し、19 世紀の流行への批判が表れていると指摘している。王妃グウィネヴァとは、中世の騎士物語「アーサー王伝説」に登場するヒロインであり、モリスは妻ジェインをモデルに用いて本作品を描いたとされている。『ユートピアだより』において、当時の華美な服装の流行を批判する一方で、未来社会の女性たちの中世風の服装を称賛していることを踏まえると、グウィネヴァの服装はモリスの単なる中世趣味によるものではなく、同時代の女性たちが体のシルエットを美しく見せるために人工的に詰め物をしていた様子を批判しているという。たしかに、未来社会の女性たちの服装は中世風であり、19 世紀の女性たちの服装に対する具体的な批判が描写されているために、モリスが同時代の流行に否定的であったといえる。一方で、「王妃グウィネヴァ」に描かれる中世風のドレスは、題材となった「アーサー王伝説」の物語に基づくものであり、モリスがどこまで当時の女性たちの服装を意識していたのかは定かではない。つまり、1859年前後にモリスが女性のドレスを自らデザインしていたのは、絵画のモデルとして描く目的だったと考えられ、19 世紀の女性の間で流行していた服装を批判する意識があったとは言い切れないだろう。

図２「王妃グウィネヴァ」（*La Belle Iseult*, 1858）（出典：TATE BRITAIN）

上記の通りモリスが『ユートピアだより』を執筆した 1880 年代にイギリスで女性の衣服改良の動きが起こっていたこと、モリスがそれ以前から女性の衣装に関心を持っていたことを踏まえると、モリスは 1859 年前後から女性の衣服に対して関心を持っていたものの、『ユートピアだより』に明確に反映されているような同時代の流行への批判的な価値観は、1880 年代頃からイギリス社会で女性の衣服改革が大きく議論されるようになったことを背景に強められたものと考えられる。その中で主張されていたのは、当時流行していた体を人工的にゆがめるタイトレーシングを否定し、女性たちの体に沿うように作られた軽快で動きやすくゆったりとしたデザインの服装を理想とする考えであるといえる。

本節では、19 世紀後半にイギリスで大きく議論された女性の衣服改良の動きを確認し、モリスの思想が形成された背景を分析した。その結果、モリスが芸術活動の中で女性の衣服に関心を持っていたことに加え、1880 年代以降に本格化した衣服改革の議論に影響を受けて当時の女性たちの服装を批判的に見る価値観が形成された可能性を示した。

第３節　『世界のかなたの森』と『ユートピアだより』の比較分析

本節では、女性の衣服に関する考えが作品にどのように反映されているのかを明らかにするために、第 1 章と第 2 章で行った『世界のかなたの森』と『ユートピアだより』の作品分析をもとに、両作品の女性キャラクターの衣服の描写における共通点や相違点を確認する。そして、作者モリスの衣服に対する考えと作中の描写との関連性について考察する。

はじめに、二つの作品の共通点を二点指摘したい。まず、階級に関係なく自由に衣服を選択できることが理想として描かれている点が挙げられる。『世界のかなたの森』においては、

第 1 章で指摘した通り女王の衣服が自身の権力や地位を象徴しているものとして描かれているのに対して、メイドの衣服は、社会的地位に縛られることなく自らの意思で選択できるものと読み取れる。ここでは、女王が殺害される存在であることに加えて、メイド自身が最終的に王妃としての衣裳を脱ぎ捨てていることを踏まえると、権力や地位を象徴するものとして描かれている女王の衣服のありかたが物語の展開によって否定されていると捉えることができる。一方で、第 2 章で論じた通り、『ユートピアだより』では、身分によって着るものを選択しなければならなかった 19 世紀イギリス社会が否定的に描かれ、22 世紀の未来社会ではエレンが自らの意思によって軽装をしていることが強調されているように、女性が自由に着るものを選択できる社会が理想的なものとして描かれている。以上のことから、両作品では共通して階級や地位に縛られずに衣服を選択する様子が理想であるとして描かれているといえる。

二点目の共通点として、宝石や装飾品で飾った派手な服装や身体を矯正するような服装ではなく、シンプルなものが理想として描かれていることが挙げられる。第 2 章で示した通り『世界のかなたの森』では、女王が非常に宝石で飾った煌びやかな装いをしていることが強調されている一方で、メイドの服装として印象付けられるのは口絵に描かれているように裸足で白く装飾の少ないものである。簡素な服装が理想的なものとして示されているとは言い切れないものの、豪華な女王と軽装のメイドというように二人の服装が対照的に描かれているという点は特徴的といえるだろう。『ユートピアだより』では、第 2 章で示した通り 19 世紀の女性たちの服装が批判され、エレンやクレアラがゆったりとした簡素な服装で描かれている点において、当時の服装とは対極的な簡素な服装が理想的なものとして描かれている。このように、『ユートピアだより』と『世界のかなたの森』では、望ましい女性の服装として簡素で軽やかな装いが描かれている。

次に、二つの作品の相違点を指摘する。第 2 章で指摘した通り、『ユートピアだより』の未来社会では労働が人々にとっての喜びとなり、服装を含め自分の見た目を整えることが当然となっている。個人の選択が尊重されるとはいえ、クレアラにとって粗末な服を着ることは容易に受け入れられるものではなく、エレンも同様の価値観を持っている。一方で『世界のかなたの森』では、女性キャラクターにそうした価値観は読み取ることができない。

最後に、本章第 1 節、第 2 節で確認したモリスの思想を踏まえて以上の相違点と共通点を考察する。モリスは、女性が自らの意思で着るものを決定できることを特に重視しており、コルセットのように着用者の健康を害するような衣服の流行に対して否定的である。この思想は、選択の自由と簡素さを理想的に描く『世界のかなたの森』と『ユートピアだより』の共通点と一致するものであり、両作品の女性キャラクターの描写にはモリスの衣服に対する思想が反映されているといえる。

本節では、第 1 章と第 2 章で行った『世界のかなたの森』と『ユートピアだより』の作品分析を踏まえて女性キャラクターの衣服の描写を比較した。その結果、女性たちが社会的地

位や階級に関係なく自由に選択できることと、簡素な服装が理想的なものとして描かれていることが共通していることが明らかになった。そしてこの二点はモリスが女性の衣服について重視していたことと一致するものであることから、モリスの考えが反映されたものであると指摘した。

本章ではまず 1882 年の講演の内容を分析し、女性が社会的な規範や身体を人工的に歪めるものから解放され、良質な衣服を自らの意思によって着ることができる状態を理想とするモリスの考えを読み取ることができた。そして 19 世紀後半の合理服協会を代表する衣服改良の議論を分析し、モリスは芸術活動の中で女性の衣服のデザインに関心を持ち、同時代の衣服改良の動きに影響を受けたことによって、19 世紀に流行した女性たちの衣服について批判的な見方を持つようになった可能性があることを指摘した。最後に、第 1 章と第 2 章の分析を踏まえて両作品の共通点と相違点の比較を行った。『世界のかなたの森』では女王とメイドという対照的な人物によって、『ユートピアだより』ではクレアラとエレンという二人の女性たちの描写を通して、自由に衣服を選択できる様子や身体を軽やかに包む簡素な服装が理想的なものとして共通して描かれていることが明らかになった。これらの共通点は、モリスが女性の衣服に関して重視していたことと一致するものである。したがって、モリスは女性が社会的地位や階級に縛られずに、身体を健康な状態で保つ軽快な衣服を身に着けることを理想とする考えをもっており、その思想は『世界のかなたの森』と『ユートピアだより』の二作品の女性キャラクターの描写においてそれぞれ異なる形で示されているといえる。

終章

ウィリアム・モリスは、『ユートピアだより』において特に女性の衣服について重要な指摘をしており、彼の作品において女性の服装は彼自身の思想が反映された重要なものであると思われる。しかし、モリスの作品を衣服に着目して分析した研究のほとんどが『ユートピアだより』を中心としており、『世界のかなたの森』は衣服の視点から十分に研究されていない。そこで本論文では、『世界のかなたの森』の女性キャラクターの衣服におけるモリスの思想を主題とした。そして本作品の衣服の描写を分析することで、モリスの衣服に関する思想がどのように反映されているかを考察し、モリスの価値観の新たな側面を明らかにすることを目的とした。研究方法としては、ファンタジー作品である『世界のかなたの森』と、異なるジャンルの作品『ユートピアだより』とを比較し、それぞれの女性キャラクターの衣服における共通点や相違点を分析する。

第1章では主に『世界のかなたの森』の作品分析を行った。はじめに、本作品が単なる余暇的なものとして見過ごされてきたこと、モリスのそのほかの活動にも通じる価値観が反映されたものとして捉えることができることを指摘した。その上で、本作品のヒロインであるメイドとその敵である女王という二人の主要な女性キャラクターを、衣服の描写に着目して分析した。その結果、女王は自分より身分の低い人々を見下す人物であり、自らの地位や権力を象徴するものとして装飾の多い華やかな衣服を身に着けていると解釈できることを指摘した。一方で、メイドは知恵と勇気を持つ人物であり、自己表現の手段としてシンプルな衣服を選択している様子が描かれていることを示した。

第2章では、『ユートピアだより』の作品分析を中心に行った。まず、19 世紀イギリスの女性たちは、家庭の経済状況や社会的な規範によって着るものを選択しなければならなかったと論じた。そして、『ユートピアだより』においては、作品全体を通じてそのような当時の慣習に対して批判的な姿勢が読み取れることを指摘した。そのうえで、本作品のクレアラとエレンという二人の女性キャラクターを衣服に着目して分析し、クレアラは、美しく外見を装い、社会的地位ではなく個人の意思を尊重して衣服を選択することを重視する人物であることを明らかにした。またエレンは、経済状況に縛られずに良質な服装を自由に選択できる未来社会を肯定する人物であることを指摘した。また彼女の服装は 19 世紀の女性たちの服装とは反対に、非常に軽やかでゆったりと身体をまとうものであることを示した。

第3章では、第1章と第2章の作品分析で明らかになった『世界のかなたの森』と『ユートピアだより』における衣服の特徴の背景を考察するために、モリスの女性の衣服に対する考えを中心に分析した。最初に、1882 年の講演「生活の小芸術」におけるモリスの発言を分析し、女性が自由に衣服を選択できることを重視し、身体を無理に歪め、動きを妨げるような服装に否定的であることを明らかにした。次に、こうした女性の衣服についての思想が 19 世紀後半に盛り上がった女性の衣服改良の議論を背景に形成された可能性があることを示した。最後に、二作品それぞれの女性キャラクターの描写の比較を行った。そして、両作

品に共通する特徴として、女性が衣服を社会的地位に縛られることなく選択できることと、シンプルで身体の動きを妨げない服が望ましいものとして描かれていることを指摘した。『世界のかなたの森』では女王とメイドという対照的な人物の描写によって、『ユートピアだより』ではエレンとクレアラという未来社会の住人の発言や描写を通じて、その二点が描かれていることを示した。

以上のように、本論文ではウィリアム・モリスの女性の衣服についての思想に着目し、ファンタジー文学である『世界のかなたの森』にどのようにその思想が反映されているかを『ユートピアだより』との比較によって分析してきた。結論としては、モリスは女性が自らの意思で服装を決定することを特に重要視しており、その価値観は両方の作品において、それぞれ異なる形で反映されているといえる。『世界のかなたの森』においては、メイドと女王という対照的な人物の存在によって、その理想的な様子が示されており、『ユートピアだより』では、22 世紀の社会に住む二人の女性キャラクターが自由に着るものを選ぶ様子が語り手を通じて読者に示されている。そしてそこで選択される服装は、身体のラインを人工的に作り変えるものではなく、軽やかにまとうものを理想としており、『世界のかなたの森』のメイド、『ユートピアだより』のエレンとクレアラの描写において反映されていると結論付けられる。

本論文では、女性キャラクターの衣服に着目してモリスの『世界のかなたの森』を『ユートピアだより』と比較して分析し、それぞれの共通点や相違点をもとにモリスの思想を明らかにした。先行研究では十分に研究されていなかった、『世界のかなたの森』を女性キャラクターの衣服に着目して分析したことに本論文の意義がある。本論文は『世界のかなたの森』と『ユートピアだより』という二作品のみを扱っているため、同時期に書かれた『世界の果ての泉』や『輝く平原の物語』などのモリスのほかの作品における女性の衣服の描写も分析することが、今後の研究課題である。

参考文献

Bennett, Phillippa. "Rethinking the Politics of William Morris's Last Romances." *The Victorian*, Vol. 1, No. 1, 2003, pp. 1-14.

Campbell, Wanda. "Clothes from Nowhere: Costume as Social Symbol in the Work of William Morris." *Writing on the Image: Reading William Morris*, 2007, pp. 107-18.

Morris, William. "*La Belle Iseult.*" 1858*,* Tate Britain HP, Retrieved November 26, 2024, from https://www.tate.org.uk/art/artworks/morris-la-belle-iseult-n04999

——. "*The Wood Beyond the World.*" 1894*,* Victoria and Albert Museum HP, Retrieved November 28, 2024, from https://collections.vam.ac.uk/item/O1309655/the-wood-beyond-the-world-book-morris-william

——.*The Collected Letters of William Morris, Volume IV : 1893-1896.* Princeton University Press, 1996.

Nijibayashi, Kei. "Some Patterns in Morris's Romantic Reformation: A Study of His Late Romances." *Kyushu Studies in English Literature,* Vol.27, No. 27, 2011, pp. 43-58.

Roberts, Helene. "The Exquisite Slave: The Role of Clothes in the Making of the Victorian Woman." *Sines: Journal of Women in Culture and Society*, Vol. 2, No. 3, 1977, pp. 570-79.

Thomas, Zoe. "Female Fellowship: Morris, feminism and the New Woman." *The Cambridge Companion to William Morris*, 2024, pp. 233-44.

小野二郎『ウィリアム・モリス研究』晶文社, 1986.

——. 『書物の宇宙　小野二郎著作集２』晶文社, 1986.

川端康雄「ケルムスコット・ハウスのオスカー・ワイルド—世紀末・社会主義・ロマンス」『日本女子大学英米文学研究』47 巻, 日本女子大学英語英文学会, 2012.

——. 「訳注」『ユートピアだより』ウィリアム・モリス著, 岩波書店, 2013, pp. 391-434.

——. 『ウィリア・モリスの遺したもの：デザイン・社会主義・手しごと・文学』岩波書店, 2016.

木村竜太「ユートピアと衣装：ウィリアム・モリスの『ユートピアだより』」『文化史学』73 号, 文化史学会, 2017, pp. 103-24.

——. 「ウィリアム・モリスの女性観：その未来社会観と衣装の改革運動を通して—」『大東文化大学英米文学論叢』49 巻, 2018, pp. 29-46.

——. 「ウィリアム・モリスとロマンス—『輝く平原の物語』を中心に」『大東文化大学英米文学論叢』50 号, 2019, pp. 21-35.

米今由希子「19 世紀後期イギリスにおける合理服協会の衣服改革—*The Rational Dress Society's Gazette* から—」『日本家政学会誌』59 巻, 5 号, 2008, pp. 313-19.

坂井妙子『ウェディングドレスはなぜ白いのか』勁草書房, 1997.
――. 『メイド服とレインコート：ブリティッシュ・ファッションの誕生』勁草書房, 2019.
志渡岡理恵「合理服、スポーツ、自転車―19 世紀イギリスの女性解放運動」『実践英文學』72 号, 実践女子大学, 2020, pp. 17-35.
鈴木桜子「19 世紀イギリスにおける改良服運動とその周辺」『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要』6 巻, 2007, pp. 1-12.
能澤慧子「ロセッティの絵画作品における女性の服装に関する史的考察」『文化女子大学研究紀要』19 号, 1988, pp. 27-42.
ヘンダースン, フィリップ『ウィリアム・モリス伝』川端康雄・志田均・永江敦訳, 晶文社, 1990.
モリス, ウィリアム『世界のかなたの森』小野二郎訳, 晶文社, 2003.
――. 『ユートピアだより』川端康雄訳, 岩波書店, 2013.
――. 『社会・芸術論集 I 小さな芸術』川端康雄訳, 月曜社, 2022.
森田由利子「ウィリアム・モリスの理想の書物―後期散文ロマンスにおける書物の表象―」『サピエンチア：聖トマス大学論叢』第 43 巻, 2009, pp. 179-94.